麗女文学における『伊勢物語』第六段の享受について

森安雅子

一

「芥川」の段として知られる『伊勢物語』第六段は、情緒的な男女の逃避行の場面とその悲劇的結末によって、『伊勢』の中で最も印象に残る章段の一つであると同時に、後代の様々な文学作品に強い影響力を及ぼした。荒木田麗女の物語作品においても、『源氏物語』や『宇津保物語』などの王朝物語とともに、『伊勢』が大きな影響を与えているが、とりわけ第六段は複数の作品の重要なモチーフの一つに位置付けられる。

しかし従来の研究では、一部の作品を除いて、麗女の物語作品への『伊勢』の影響について、必ずしも十分に言及されていないように見受けられる。[1] しかしながら、麗女が晩年に著した『自叙伝』に、

幼きより和漢の書をよむことを好めり。兄弟、男子なるにより、常に其のふるまひを見ならひて、女子のわざをさらに学ばず。七歳にて入学せんことを願へども、女子の無用の事として、父母さらにゆるされず。せむかたなきまゝに、兄武世の読まるゝをきゝて、大学をかつ〳〵覚えて、そらによみけるにぞ、兄正宮、強く好みけるを賞して、古今集の序、伊勢物語等をよませらるゝにより、いまだ手ならひぞせざれども、仮名文字よみおぼえて、継松などをもとれり。[2]

とあるように、『伊勢』は早熟な麗女が幼少の頃から親しんでいた書物であり、[3] 『伊勢』第六段との影響関係を検討することは、麗女の創作方法の全容を明らかにするうえで必要な作業であると考えられる。

以下、本稿では、第六段の影響が顕著に窺える物語作品を取り上げて、麗女文学における『伊勢』第六段の享受の諸相について考察してみたいと思う。

二

麗女の物語作品と『伊勢』第六段との関係を追求していく前に、先ず最初に確認しておきたいのは、明和八年（一七七一）二月に

執筆された歴史物語『池の漢屑』である。『池の漢屑』は、後醍醐天皇の元弘三年（一三三三）から後陽成天皇の慶長八年（一六〇三）に至る十四代約二七〇年間の歴史を編年体で書き綴った作品であるが、その巻四『崇光院』の貞和四年（一三四八）条に次のようなエピソードがある。

故俊基の弁の御女に、弁の内侍と聞へしは、かたちもいとめでたく、心ばへもらう〳〵しうおはしけるに、おさなくて親にもおくれ給ひしかば、先帝ことに哀なるものに思し召て、むつまじう召つかはせ給ひし。隠れさせ給ひて後は、今の上につかふまつりてゐたまへるを、いかなる玉垂のひまにか見奉りけん。京なる師直せちによばひ渡りて、玉章の数もかさなりけれど、いとめざましき事におぼいて、いらへをだにし給はぬに、思ひ侘て、今はひたすらにぬすみていてゆかんと思ひつゝ、えもいはずむくつけき心がまへをなんしけり。かちうじてゐて奉るに、道の程にて、正行が召ありて、芳野の宮に参るにぞ行あひける。いとあやうしと見てければ、とゞめて取かへして、やがて芳野殿に参りたり。かくと奏し奉れば、上はいみじき者に思し召れつゝ、御気しきよくて、其儘に内侍をば賜はすべき仰事有に、正行かしこまりて奏し奉る。

とても世にながらふべくもあらぬ身にかりのちぎりを
いかでむすばん

上はいかにと思し召れしに、後にぞ思し召合させ給ひて、いみじう哀がらせ給ひしとかや。

『池の漢屑』は、北朝側の事件や出来事を主軸として、南朝側の事蹟を併記するという体裁をとっているので、北朝の崇光天皇の在位である貞和四年の時点において、「先帝」は故後醍醐天皇を「今の上」は後村上天皇をそれぞれ指している。

南北朝の騒乱の時代を背景に、室町幕府の重臣高師直の策略によって拉致されかかった弁の内侍を、間一髪で奪い返した南朝方の将軍楠正行の臨機応変ぶりを語る右のエピソードは、『吉野拾遺』巻一第九話「高師直直参の内侍をうばふ事付タリ楠正行が事」を主たる典拠として、部分的に同書巻一第八話「宗房卿秀句の事」を参照したものである。(4)『吉野拾遺』には、後醍醐・後村上天皇時代の南朝廷臣の逸話が数多く収載されているが、このエピソードもまた、後に四条畷の戦いで討死する正行の在りし日の姿を回想した一篇と推測される。(5)紙数の都合上、『吉野拾遺』の引用は省略するが、エピソードの趣旨は次の三点に要約できる。

①高師直が弁の内侍に懸想する。
②師直が策略を用いて弁の内侍を掠奪しようとする。
③楠正行の機転によって内侍を奪い返されてしまう。

ここで注意されるのは、師直が弁の内侍を盗み出すことに一旦は成功するものの、結局は女を奪い返されてしまうというストーリー展開が、『伊勢』第六段を髣髴とさせる点である。特に、師直方の手に落ちた内侍の心境を説明する箇所で、「君はいとおそ

ろしく、鬼にとられ玉へる心ちしたまひて」と、唐突に「鬼」に言及しているのは、第六段の姫君が逃避行の途中で鬼に一口で喰われてしまった場面を踏まえたものであり、吉野宮に参内する途次の正行が、「内侍のなき玉へる声をきゝて」内侍を救出した箇所は、宮中へ参内しようとした基経と国経が、妹の泣き声を聞き付けて取り返した場面にそれぞれ対応していると考えられる。[6]

しかし一方で、『吉野拾遺』には『伊勢』第六段とは異なる要素も提示されている。両者の大きな相違点は、第六段では相愛の男女の逃避行であった話が、『吉野拾遺』では願かぬ女に業を煮やした男が、策略をめぐらせて力ずくで女を自分のものにしようとする話となっていることである。

麗女もまた、『吉野拾遺』のエピソードと『伊勢』第六段との類似性について承知していたものと推察される。しかも、麗女の物語作品においては、『伊勢』第六段を作品に取り入れる際に、『吉野拾遺』のエピソードを緊密に繋ぎ合わせていたと推測されるのであるが、その様相については以降の考察において具体的に明らかにしていきたいと思う。

三

『池の藻屑』から七ヶ月後の明和八年九月に成立した『五葉』は、太政大臣家の五人の子女達をめぐるそれぞれの恋物語を短編集仕立てにまとめた作品であるが、その巻五「呉竹」は、『伊勢』第六段の趣向に基づいて創作した最初の物語作品として注目される。「呉竹」の概要は次のようなものである。

太政大臣家の三郎君の宮のすけは、内の御匣殿と恋仲であったが、内裏で催された臨時の祭りの遊びの後、突如として御匣殿が行方知れずになってしまう。実は、遊びの際の騒ぎに紛れて、以前から彼女に想いを寄せていた師宮の中将が、密かに御匣殿を盗み出し、妹の麗景殿女御の許に隠し置いたのであった。やがて、女君の居場所を突き止めた宮のすけは、麗景殿に忍び込み、宮の中将の手から再び女君を取り戻した。

「呉竹」では、宮の中将に横取りされた御匣殿を宮のすけが再び取り返す場面に、『伊勢』第六段の趣向が利用されている。例えば、宮の中将を装って首尾よく麗景殿に忍び込んだ宮のすけが、女君を背負って暗闇の中を桐壺の知り合いの女房の局まで逃げていく場面では、次のように第六段の影響が看取される。

人々は皆ねたるにやと思しく、いとゞしめやかにおぼへ給へば、起出て、女君をばかろらかにかきおひつゝ、忍びて出給ふ。（中略）月もかきくもり、空の色も物むづかしう、いなづまのとき〳〵かゞよふに、夜もいたく更ぬれば、何となう物すごきこゝちするに、風いとすゞしう、ほたるたかうとびつるぞ、さすがに雁につげこせなど、いはれたり。つねになれ給へる道も、いとたど〳〵しうはるけきこゝちせられ給ふ。

（「呉竹」）

むかし、おとこありけり。女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみ出て、いとくらきにきけり。（中略）ゆくさきおほく夜もふけにければ、おにある所ともしらで、神さへいといみじうなり、雨もいたうふりければ、あばらなるくらに、女をばおくにおしいれて、おとこ、弓やなぐゐをおひてとぐちにをり。はや夜もあけなんと思ひつゝゐたりけるに、おにはやひとくちにくひてけり。[7]

（『伊勢』第六段）

ここでは、主人公達が女君の監禁場所から脱出する際の描写に、第六段の前半部の情景を援用することによって、逃避行の臨場感を高める効果をもたらしていると考えられる。尚、本文中の波線部の記述は、『伊勢』第四十五段に、

夜ふけてやゝすゞしきかぜふきけり。ほたるたかくとびあがる。この男見ふせりて、

ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋かぜふくとかりにつげこせ

と、自分に対する恋心を胸中に秘めたまま亡くなった女のためにその喪に服した男が、生前に一度も言葉を交わすことの無かった女を思いやる場面を、部分的に引用したものである。

更に、後日、事件の顛末を伝え聞いた東宮が事件を種に宮のすけと和歌を唱和する場面でも、「芥川」の段が強く意識されている。

宮、その桐つぼにゐてゆきけんさまを見ざりしなん、いと口おしうとの給はせて、

恋の道まよはじとてや芥河ふるきあとある露を分けん

いとかしこう笑はせたまふ。すけの君、

あくた川昔の跡をとめつゝも露けき道を分まよひけり

内に閉しめしければ、いみじう思しめされて、やがて芥河の中将と仰らるゝにぞ、女ばうたちもいとおかしう思ひたり。

この場面において、「ふるきあと」「昔の跡」と両者の共通の認識の下に言及されているのは、『伊勢』第六段の昔男と二条后の恋物語に他ならない。しかし、「呉竹」では、第六段の悲劇的側面は完全に払拭されており、「芥川」は男女の駆け落ちを意味する隠語の役割を担っているだけである。

しかも、「呉竹」における宮のすけと御匣殿の逃避行は、同じ逃避行とは言いながら、宮の中将の横恋慕から逃れるための手段であって、第六段の世界とは微妙に異なる点が注意される。すなわち、御匣殿をめぐる宮のすけと宮の中将の三角関係や、恋敵の宮の中将に拉致された御匣殿を宮のすけが再び奪い返すという趣向など、「呉竹」では『伊勢』第六段とは明らかに異質な物語が展開されているのである。

こうした一人の女をめぐる三角関係の構図や、奪われた女を再び奪い返すという趣向は、前述した『吉野拾遺』のエピソードから着想を得たものではないかと推測される。御匣殿に横恋慕した宮の中将が、策略を用いて首尾よく女を手に入れるものの、宮の

すけによって女を奪い返されてしまうというストーリー展開は、『吉野拾遺』をそのまま踏襲したものであり、御匣殿をめぐる宮の中将と宮のすけの役割は、『吉野拾遺』の弁の内侍をめぐる師直と正行の関係とほぼ一致している。

つまり、「呉竹」の作品構造は、基本的なストーリー展開と人物設定を『吉野拾遺』に依拠しながら、二人の恋を妨害する恋敵から主人公達が脱出する場面に、『伊勢』第六段の描写を取り入れていると考えられる。その結果、第六段においては主人公達に悲劇的結末をもたらした逃避行が、「呉竹」では二人の恋の成就に向けての逃避行へと転換されているのである。

四

『吉野拾遺』のモチーフを絡ませることによって『伊勢』第六段の世界を転換してみせた「呉竹」に対して、明和八年十一月に執筆された『ふじなみ』は、光源氏や狭衣の美貌に喩えられる男主人公の恋愛遍歴を、様々な古典作品の趣向を巧みに重ね合わせて構成した長編の擬古物語であり、第六段の扱い方にも「呉竹」とはまた違った方向性が認められる。先ずは、作品の梗概について確認しておくことにする。

左大臣の子息の小六条の中納言は、太政大臣邸で催された賭弓の遊びの折、風で巻き上げられた御簾の隙間から、太政大臣の末の姫君を偶然目にする。姫君の美しい容姿に心奪われた中納言は、太政大臣邸での藤の宴に際し、姫君付きの侍女を介して姫君への恋心を訴える。太政大臣は内心では姫君を中納言にと考えてはいるものの、太政大臣の長女で今は亡き弘徽殿女御の代わりに姫君の入内を望む帝の申し出もあって、はっきりと決めかねていた。姫君に対しては、内大臣の子息の頭中将も熱心に求婚してくるが、実兄の宰相中将までもが実の妹への道ならぬ恋に思い悩んでいた。各々の思惑が交錯する中、仲介役の女房を通じて執拗に言い寄っていた中納言は、遂に姫君と契りを結んだ。〈巻一〉

宰相中将の妹君に対する恋慕の情はますます募る一方である。そうした中、密かに姫君との逢瀬を重ねていた中納言であったが、中納言の妹の藤壺女御に対抗するため、太政大臣は一転して姫君の入内を決意する。追い詰められた中納言は、あらかじめ五条にしつらえておいた隠れ家に姫君を連れ出す。しかし、中納言が姫君の傍を離れた僅かの間に、姫君は兄の東宮の亮によって連れ戻されてしまう。この事件の後、世間を憚って姫君は女御ではなく尚侍として参内することになり、中納言は事件の責任をとって官職を辞して蟄居する。〈巻二〉

尚侍の入内の後、兄の宰相中将は心痛の余り病死する。このように多大な犠牲を払って敢行された姫君の入内であったが、太政大臣の意に反して、尚侍はともすれば藤壺女御に圧倒されがちであった。正月の節会の頃、中納言は女君と束の間の逃亡生活を送った五条の屋敷へ方違えに赴き、梅の花を見て在りし日々を述懐す

る。やがて謹慎も解けて再び出仕した中納言は、内大臣に昇進し、故弘徽殿女御所生の女一の宮と結ばれる。今は思いのままの世となった内大臣は、かつての太政大臣の仕打ちを恨んで、尚侍の兄弟に冷淡な態度を示す。当初の期待を裏切って中途半端に終わってしまった尚侍の宮仕えを、太政大臣は今更ながらに後悔するのだった。その後、御世が移り変わり、病の重くなった尚侍は一人寂しく出家する。〈巻三〉

粗筋を一読しただけでも明らかなように、『ふじなみ』の出典として多用されているのは『源氏』と『宇津保』であるが、『伊勢』も作品の重要な局面で利用されている。特に、入内を直前に控えた姫君を中納言（この時大納言）が太政大臣邸から盗み出す場面は、この物語の最大のクライマックスであると思われるが、二人の行動の背景にあるのは、やはり『伊勢』第六段であったと考えられる。[8] 更に、事態を打開しようとした中納言の無謀な賭けが、結局は女方の兄弟によって妨げられてしまうという事件の成り行きも、第六段の展開とほぼ共通するところとなっている。

また、事件が明るみに出た後、責任を感じて自邸に引き籠っていた中納言が、事件の舞台となった五条の屋敷へ方違えに訪れた際、庭に咲く梅花を目にして感慨に耽る場面には、次のように『伊勢』第四段の内容が踏まえられている。

大将ありし五条の家にかたゝがへとて渡り給へり。こゝにてはつねよりも思ふ事おほく、はしたなきまでしほたれ給ふ。かのもろともに見給ひし梅のいとゝくほころびたるに、たゞそのよの心地のみして、らうたげなりし俤のまづおぼえ給へば、かたはらさびしくまどろまれ給はず。月を哀とのみいはれ給ふ。

（『ふじなみ』）

むかし、ひんがしの五条におほきさいのみやおはしましける、にしのたいにすむ人ありけり。それをほいにはあらで心ざしふかゝりける人、ゆきとぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころはきけど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、猶うしとおもひつゝなんありける。又のとしのむ月に、梅の花ざかりに、こぞをこひていきて、立てみ、ゐてみ、見れど、こぞにはにるべくもあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたぶくまでふせりて、こぞをおもひいでゝよめる。

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〳〵とあくるに、なく〳〵かへりにけり。

（『伊勢』第四段）

『ふじなみ』と『伊勢』第四段を比較すると、心ならずも女と引き離され、その居所は知りながら再会する手立てのない男主人公が、かつて女と一緒に過ごした屋敷を訪れ、梅の花に失った女性の面影を偲ぶという構想において両者は一致している上、細部の状況についても類似点が見出される。時節が睦月初旬であるこ

と、女を失ってから一年後の出来事であること、女との思い出の場所が五条に設定されていること等である。現存する『伊勢』の第三段から第六段にかけての章段は、二条后関連のものとして理解されているが、麗女もまた、第六段の後日談として第四段を把握していたことが推察される。

更にこの場面には、『後撰和歌集』巻第十・恋二・六八四・よみ人しらずの「ひとりねのわびしきままにおきゐつつ月をあはれといみぞかねつる」[9]も引歌として用いられており、『伊勢』第四段の世界との相乗効果で、最愛の女性を失った中納言の悲哀と悔恨の情を一層際立たせている。

『ふじなみ』では、「よしやいみじきつみにあたる共おしむべき身かは」と、一切を投げ捨てて女君との恋に突き進んで行った中納言の言動に、身分違いの恋を逃避行という究極の形で成就させようとした『伊勢』第六段の昔男の情熱が投影されており、『伊勢』の世界が概ね原話の構想に沿った形で移し替えられている。

しかし一方で、『ふじなみ』の中納言には『伊勢』の昔男とは異なり、その後の新たな人生が用意されていた。世間を騒がせた事件から一年後、失った青春への悔恨を一つの契機として、中納言は再び政界に復帰を果たし、凋落の一途をたどる尚侍の一族とは対照的に、以後着実に栄達への道程を歩んでいく。中納言の栄光と挫折は、朧月夜尚侍との密通事件で窮地に立たされながらも、須磨・明石に流離ののち都に帰還し、再び宮廷に返り咲き准太上天皇として栄華を極める光源氏の人生から着想されたものであり、また、過去の苦い思い出と決別して、理想的な女性である女一の宮との結婚生活に満ち足りた日々を送る中納言の人物造型は、貴女への求愛は叶えられなかったものの、代わりに今上の女一の宮を得た『宇津保』の仲忠に基づいて創出されていると推定される。

「呉竹」と『ふじなみ』の間に存在する『伊勢』第六段に対する扱い方の相違は、短篇と長編という両者の作品形態の違いも関係していたものと思われる。『ふじなみ』が長編物語として成立するためには、『伊勢』の世界を新たな展開へと導く『源氏』や『宇津保』の趣向が要請されたのである。

五

麗女にとって事実上最後の物語作品となった『怪世談』は、安永三年（一七七四）秋頃に執筆された十二話の短篇集（十二話本）に、安永七年頃に更に十八話を書き足し、最終的に三十話から構成される短篇集（三十話本）の体裁に編纂されたと推測されているが、本作品もまた、和漢の古典作品の影響を受けて成立した短篇物語集であり、『伊勢』第六段の趣向も第八話「芥川」と第十二話「何某院」の二作品に影響を与えている。[10]そこで先ず、十二話本の第四話に収録され、「芥川」より成立が先行すると考えられる「何某院」から考察を加えていくことにする。

「何某院」の内容は次の通りである。幼少の頃から山の座主に

預けられていた大納言の末の若君は、院の御声掛かりで下山し侍従として朝廷に仕えることになった。侍従は密かに宰相の律師と契りを結んでいたが、彼に懸想する右大弁に騙されて河原院に連れ込まれてしまう。ところが、その夜半に、今度は弁の目の前で侍従が鬼に連れ去られるという事件が起こり、報告を受けた大納言家は大騒動となる。しかし、やがて侍従の無事が確認されて事件は一件落着する。事件の真相は、弁を懲らしめるために、侍従の家来の左近の将曹が自ら鬼に仮装して仕組んだ狂言であった。

「何某院」の出典については以前考察したことがあるので具体的な引用は省略するが、その題名が示唆するように、『源氏』「夕顔」の巻における夕顔怪死事件を主要な素材とする一方で、右大弁が侍従を連れて人気のない廃屋に居たところ、夜半に侍従が鬼に攫われてしまったという話の基本的なモチーフや、鬼に喰い殺されたものと思われていた侍従が、実は家来の左近の将曹の機転によって弁の手から取り返されたのであったという意外な結末に、『伊勢』第六段の影響が確認出来る。[11]

特に「何某院」のストーリー展開には、第六段の作品構成が強く反映されていると思われる。第六段の内容は、前半の恋物語と後半の注釈部に大別され、前半部で女を喰い殺した鬼の正体を後半部で明らかにするという作品構成になっているが、「何某院」においても同様の手法が受け継がれている。すなわち、河原院での鬼の出現を一つのクライマックスとして、侍従を喪失した弁や父大納言の悲嘆を描いた後に、「ありつる鬼も、誠には将曹がしつる事にて…」と事件の真相が明かされているのである。

しかしながら、「何某院」と『伊勢』第六段との関係で注意されるのは、第一に、昔男と二条后という男女の恋物語が、侍従をめぐる宰相の律師と右大弁という男色の世界に置き換えられている点である。しかも律師と侍従の関係は、侍従が山の座主の許に預けられていた時期に生じたものであり、僧院を舞台とした稚児物語の性格をも有している。

第二は、侍従の忠実な家来として活躍する左近の将曹の存在である。将曹は、主人の危機を回避するために、鬼の姿に扮装して就寝中の二人を脅かし、弁が助けを求めて侍従から離れた隙に侍従を救い出した。将曹による侍従奪回のモチーフは第六段の趣向に基づくものであるが、彼の置かれた立場は、昔男に連れ去られそうになった二条后を取り戻した基経・国経兄弟ではなく、師直に拉致されそうになった弁の内侍を救出した『吉野拾遺』の正行の方により近似していると思われる。更に、『吉野拾遺』との関係に着目すると、自らの想いを遂げるために相手の気持ちを無視して実力行使に踏み切る弁の人物造型には、弁の内侍を策略を用いて奪い取ろうとした師直のイメージの投影が想定される。

そして第三は、基経・国経兄弟が昔男から妹を取り返した経緯を鬼の仕業に仮託した第六段に対して、「何某院」では本当に将曹自身が鬼の扮装をしていることである。しかも将曹の行為は、

『源氏』「夕顔」の巻や『伊勢』第六段などといった著名な古典作品における怪異描写を前提に、河原院には鬼が棲んでいるという認識を逆手にとって成り立っている点で、極めて確信犯的であったと言える。

さて、「何某院」と『伊勢』第六段との関係を一通り確認した上で、次に、「芥川」について考察していくことにする。「芥川」は「何某院」と内容面で極めて密接に関連しているが、その梗概は以下のようなものである。

前斎宮に仕える女別当の君は、宮の中将と密かに契りを交わしていた。ところが、前々から執拗に別当の君に言い寄っていた兵衛の少尉が、女から全く相手にされないことを恨んで、ひずましの女を味方につけて彼女を局から盗み出してしまった。しかし、少尉が事前に用意しておいた所へ女を連れていく途中、内大臣がいつも方違えに使用している邸宅で一晩を過ごそうとしたところ、その一部始終を目撃していた中将の御随身の計略によって、騙されて女から離れた隙に女を取り戻されてしまったのであった。

「芥川」という題名からも察知されるように、本話では、兵衛の少尉が別当の君を盗み出す場面に、『伊勢』第六段の趣向が取り入れられている。特に、執拗な求愛にも関わらず全く心を開こうとしない別当の君を少尉が盗み出すという行動に出たのは、長い間求愛し続けていた姫君を辛うじて盗み出して連れて逃げた第六段の昔男の行為を転用したものであり、両者とも、現在の状況下では女と添い遂げることが不可能であるゆえに非常手段に訴えた点が共通していると思われる。また、計画通り女を盗み出したものの、「行先きいとくらく、風の気はひも殊の外」であったために、やむを得ず前斎宮の宮家に隣接する内大臣の別宅に立ち寄る設定も、「ゆくさきおほく夜もふけにければ、（中略）神さへいといみじうなり、雨もいたうふりければ」、鬼の棲む所とも知らずに荒れた蔵で一晩を過ごそうとした第六段と状況が極めて一致している。

少尉の言動に『伊勢』第六段の昔男が強く意識されていることは、別当の君に対して自己の行為を正当化しようとする少尉の次の発言内容からも明らかである。

ゆくりなきをなめしとおぼすらめど、かゝる道にはためしなき事にも侍らず。かういみじき雨風に、あやなくあくがれまどひ侍るも、おぼろげの心とやはおぼす。昔の芥川にもふかき思ひはまさりなんものを、只一言哀とだにのたまはゞ、露と消なん身も何か惜からじ

つまり少尉は、自らの恋を昔男と二条后の恋物語に重ね合わせようとしているのである。ただ、ここで少尉が「芥川」の段を引き合いに出したことは、昔男に擬えられる少尉が、昔男と同様に盗み出した女を取り返される運命にあることを、皮肉にも暗示していたと考えられる。

一方、別当の君をめぐる宮の中将と少尉の三角関係や、少尉に

盗み出された女君を中将の御随身が取り返すという趣向は、「何某院」と同様に、『吉野拾遺』に由来するものであると思われる。但し、「芥川」と「何某院」においては、「呉竹」の宮のすけのように男君自身が女の救出に向かうのではなく、従者が主人に代わって活躍している点が、『吉野拾遺』の構想により類似している。

しかしその一方で、「芥川」では「何某院」とは異なり、「鬼」が物語中に登場していない点が注意される。助けに来た御随身に対して別当の君が、「こや鬼ならん今喰るゝにこそと思ふもせんかたなく、身の毛もいよだつばかりにて、物もいはれず、たゞわた〳〵とふるはれたり」と、『伊勢』第六段の姫君のように自分も鬼に喰われてしまうのではないかという反応を示したり、内大臣邸から女の許へ飛んで帰ってきた少尉が自分の留守の間に女が行方知れずになったことを知って、「さはくらき夜のまよひに、鬼もやとりもていにしとおぼゆれば、むくつけうさへなりて、又せん方もなくあきれたるばかりなり」と、すぐさま第六段の鬼一口を連想するなど、「芥川」の至る所で「鬼」に言及されているものの、原話の怪異談そのものが再現されているのではない。それらは全て登場人物達の想像の範疇にとどまるものであり、「昔の物語めきて、その鬼よりもまさりてこそ覚ゆれ」と、その果たした役割から第六段の鬼に見立てられた御随身も、「何某院」の左近の将曹のように実際に鬼の扮装をしたのではなく、少尉を女の傍から引き離すために、内大臣が火急の用件で少尉を捜しているという話を捏ち上げ、少尉が慌てふためいて女をその場に残して内大臣邸へ馳せ参じた後で、労せずして女を取り戻したのであった。[12]

「芥川」は「何某院」と同一のモチーフを扱いながらも、異なる作品展開を創出しているところに、作者の工夫の跡が読み取られる。但し、それは同時に、『呉竹』から「芥川」に至る創作過程において、『伊勢』第六段のモチーフが徐々に原型から遠ざかっていったことをも意味していた。

六

以上、『伊勢』第六段との影響関係を中心に作品を読み解く作業を通して、麗女が物語作品の創作に際して、第六段の趣向を繰り返し利用しながら作品を構成している有様が確認された。麗女の物語作品における『伊勢』第六段の利用方法の特色には、先ず、著名な怪異描写の場面ではなく、昔男と二条后の連綿とした恋物語の方にその基本的な趣向を依拠していることが挙げられる。また、第六段を単独で用いるのではなく、『吉野拾遺』や『源氏』『宇津保』という別種の趣向と結び付けたりして、同一のモチーフを少しづつ変形させながら繰り返し作品中で利用する傾向も指摘できる。

特に、後者に関しては、『伊勢』第六段の利用に限定される手法ではなく、他の素材の扱い方についても同様であったと推測さ

れ、今後、麗女作品の典拠探索の際の有力な手掛かりの一つになり得るのではないかと思われる。

注

（1）例外として、『ひおり』（擬古物語、安永五年四月成立）と『伊勢』第九十九段の関係について、伊豆野タツ「荒木田麗女作『飛袁理』について」（『実践女子大学紀要』第二集・昭和二十九年一月）、内山美樹子「近世文学と女性」（『岩波講座日本文学史（第八巻）十七・十八世紀の文学』岩波書店・平成八年）などの論考が備わる。

（2）大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』第一巻（国本出版社・昭和九年）六七五頁。

（3）尚、この引用箇所の記事内容に関して、船戸美智子「『池の漘屑』『月のゆくへ』―女流文学者の古典趣味―」（『国文学解釈と鑑賞』第五四巻第三号・平成元年三月）は、「麗女の自伝の中で、幼少の頃、兄が『大学』を読むのを聞いて暗唱したという下りには、明らかに紫式部の逸話への意識が表われている。」と推察されている。

（4）『池の漘屑』への『吉野拾遺』の影響については、小泉弘「吉野拾遺と東斎随筆の世界」（『日本の説話』第四巻、東京美術・昭和四十九年）に指摘がある。

（5）但し、『池の漘屑』では、四条畷の戦いの記事の直前にこのエピソードが挿入されており、「とても世に…」の詠歌は正行の死を暗示する役割を果たしている。

（6）『吉野拾遺』の表題及び本文は、『吉野拾遺物語』四巻四冊（貞享四年〈一六八七〉刊、岡山大学池田家文庫所蔵本）に拠った。

（7）以下、『伊勢』の引用は、『伊勢物語拾穂抄』（『北村季吟古注釈集成』第二巻、新典社・昭和五十一年）を利用した。

（8）その一方で、この場面には、『源氏』「夕顔」の巻における夕顔怪死事件の描写も参照されている。

（9）『八代集抄』第三巻（『北村季吟古注釈集成』第二十七巻、新典社・昭和五十四年）

（10）倉本昭「『怪世談』における荒木田麗女の翻案の手法」（平成六年度日本近世文学会秋季大会発表資料）

（11）拙稿「『怪世談』についての一考察―第十二話「何某院」と第三十話「天の河」の構想をめぐって―」（『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第十二号・平成十三年十一月）

（12）女主人公の奪回方法をめぐっては、『伊勢』第六段とは異なる素材の存在が想定されるところであり、注10の倉本昭は、『宇治拾遺物語』第二巻第九話「季通欲レ逢レ事事」（『今昔』第二十三巻第十六話と同話）を指摘している。

尚、麗女作品のテクストについては、『池の漘屑』は『改定史籍集覧』第三巻（臨川書店・昭和五十八年復刻版）を、『五葉』『ふじなみ』『怪世談』は伊豆野タツ編『荒木田麗女物語集成』（桜楓社・昭和五十七年）を使用し、引用に際しては読み易さを考慮して私に改変を加えた。

（もりやす　まさこ　台湾・長榮大学助理教授）